畑實先生を送る

高田知波

駒澤大学国文学科にとっての二十世紀最終年は、定年規程に従って、畑實先生をお送りしなければならないという巡り合わせになった。

先生が、自然主義を中心にした近代文学研究の大家として活躍されてこられたことは、あらためて説明するまでもない。はるか後輩の私などに、学者としての先生の業績をエスティメイトすることなどできるはずもないが、同じ近代文学に携わる者の一人としての感想を述べさせていただくならば、先生のご研究の最大の魅力は、オーソドックスで手堅い研究スタイルをみごとに通されたという点にあるという気がする。二十世紀最後の四半世紀は、さまざまな輸入理論が交錯する中で方法論議が囂しく、右顧左眄、時には無節操とも思えるような変わり身をくりかえす研究者たちの悲喜劇があちこちで見られた時代であった。そうした状況のもとで、けっして付和雷同することなく研究の正道を歩み続けられた先生の姿勢から、私は学問にとって最も大切なものは何かということを、身をもって教えていただいたような気がする。

教育者としての先生が、数多くの後進を育ててこられたことも言うまでもないが、先生の授業方法は、研究スタイルと同じように、いかにも大学教育らしいオーソドックスさに貫かれていた。私はたまたま先生と研究室が隣同士であった。仕切りの壁を通して畑研究室から漏れてくる先生の大学院講義の、うっとりするような名調子を盗聴（？）することが、私にとって大きな楽しみの一つだった時期がある。先生の授業に比べると、私の授業は随分乱暴なものであったが、いま思えば、私のやんちゃが許されていたのは、一方に先生の一分の隙もない正統派の授業スタイルが厳存していたからにほかならない。

先生はまた、少年時代に東京大空襲をご体験されていることもあって、平和を希求する強い気持ちを持ち続けてこられた。日頃は物静かでどちらかといえば寡黙な先生が、戦争と平和にかかわる話題になると、一転して口調が熱っぽくなられるのが常であった。おそらく先生の目には、私たち戦争を知らない世代は何とも頼りなく、あるいは焦れったいものに映っていたに違いないが、先生がきわめて温厚なお人柄であったから一層、先生の言葉には特段の重みがあった。教え子からも同じような声を聞いたことがある。

先生はお酒をまったく嗜まれない方でもある。先生と盃を交わしながら文学を語り合うという機会を得られなかったことが心残りであるが、今後の先生のご健康を願いつつ、長年のご尽力に対して、心からお礼を申し上げたいと思う。